

# エリザベス1世へのプロポーズの地 ケニルワース城を征く

1575年7月9日。期待と不安が入り混じった緊張感に包まれながら、エリザベス1世の到着を待つ男がいた。人生を賭けた「最終決戦」で勝利を収めるべく、滞在する女王のために城を大々的に改築し、贅を尽くした催しを企画。しかしその結果、自らは破産寸前まで追い込まれていた――。今号では、食欲に頂点を目指したある男の数奇な生涯と女王の恋、そして求愛劇の最後の舞台となったケニルワース城を紹介しよう。

ロンドンから車で北上すること、約2時間。イングランド中部コヴェントリーの近くに、ケニルワース城がある。人工池（現在は草地となっている）にぐるりと囲まれ、中世時代にはその美しさを讃えられた城だったが、現在はすっかり廃墟と化している。

この城が建てられたのは1120年代。当時の国王ヘンリー1世の命を受け、イングランド中部で軍事的権勢を誇っていたウォリック伯爵ロジャー・ド・ボーマンを牽制するため、彼の居城であったウォリック城からわずか5マイルの距離に建造されたのが、ケニルワース城の起源だ。今日の姿に変わり果てたのは、17世紀に起きた清教徒革命時で、王党派のシエルターとして使われないよう議会派勢力によって破壊され、以降再建されることはなかった。かつて女王を歓待し、城としてのピークを迎えていた華々しい日から、たった70年後のことである。

## 幼馴染はエリザベス1世

530年におよぶケニルワース城の歴史の中で、同所をもっとも輝かせた立役者の名をロバート・ダドリーという。ロバートが城主となったのは1563年、30歳を過ぎた頃。当時のイングランド君主、エリザベス1世から「レスター伯爵」の称号とともに与えられた城であった。

2人は幼少期から一緒に育った幼馴染だった。当時の上流階級の若い子女たちは、後見人となる身分の高い貴族のもとに預けられ、学問や社交、礼儀作法を学ぶのが一般的であった。ロバートは預けられた王宮のひとつで、1歳下のエリザベスと多くの時間をともに過ごし、幼い頃には気の合う友人として、大人になってからは公私ともに信頼し合う相手として、常に傍にいたのである。時折ここを訪ねてくる意中の相手、エリザベスを喜ばせようと、ロバートはケニルワース城の改築に桁外れの財をつぎ込んだ。自分に気持ちを引き寄せるためにも、より大規模に、壮麗に整備していく気持ちをロバートは止められなかった。

## スキヤンダラスな恋

ロバートの父、ノーサンバランド公爵ジョン・ダドリーは、ヘンリー8世の長男で年若く



▲ロバートの寝室として使われた「ステート・アパートメント」(写真上の中央)と、エリザベスとその家臣団の宿泊用に建てられた「レスターズ・ビルディング」(写真上の奥)。城の建造には、ウォリックで採掘される赤みを帯びた「新赤色砂岩」が用いられた。

▲1575年当時のケニルワース城の様子を再現したイラスト(写真左)。外堀の周りをぐるりと人工池に取り囲まれているのがわかる。

ケニルワース城で命運を賭けたプロポーズが決行された、1575年頃のエリザベス1世とロバート・ダドリー。

© Historic England (illustration by Peter Urmston)

して国王となったエドワード6世の後見人として、宮廷で権力を握る人物だった。ノーサンバランド公は、その立場を利用し、病弱だった少年王の亡き後、王位継承順位の第1位であった少女メアリー(のちのメアリー1世)を差し置き、彼女の従姉妹にあたるレディ・ジェーン・グレイと息子を結婚させて、強引に女王として即位させた。彼の目的は、息子とジェーンの間でできる子ども、つまり自らの孫を次なる王位につけ、政治的実権を握り続けることだった。

ところがこの企みは失敗し、「正当な王位継承者」を主張するメアリーにより、ノーサンバランド公は1553年、父親に賛同して挙兵した5人の息子たちとともにロンドン塔へ投獄された。ノーサンバランド公は反逆罪で処刑され、ジェーン・グレイ夫妻もそれに続く。ロバートを含むほかの4人の兄弟たちは、メアリー1世の夫、のちのスペイン王フェリペ2世からの温情で釈放されたものの、1年以上もの間、明日の命をも知れない恐怖と戦いながら劣悪な環境に苦しめられた記憶を、忘れ去ることはできなかったに違いない。また自由になったとはいえ、「大罪人」のレッテルを貼られたロバートたちの未来は、明るいものではなかった。爵位は剥奪され、領地も手放さなければならなかった彼らは、必死にメアリー1世のご機嫌取りに奔走するも、宮廷に居場所はなかったのだ。

一方、エリザベスも苦渋の日々を過ごしていた。異母姉メアリー1世の苛烈なカトリック政策への不満により、各地で起きていたプロテストанトの反乱に加担したとしてロンドン塔に投獄。釈放された後も、辺境の館で幽閉生活を送っていたのである。2人がどのようにして再会したかは知る由もないが、互いに苦難の道を歩む彼らの絆は瞬く間に深まった。

1558年にメアリー1世が病死し、エリザベスが25歳で即位すると、ロバートは「王室馬寮長」の役職を与えられる。これは女王の愛馬を管理し、公務にもつき従う高官位の要職で、エリザベスが女王になって最初に行ったのが、この官職任命だった。翌年にはガーター勲章も与え、騎士の称号を名乗れるようにするなど厚遇ぶりは目覚しく、宮廷内では2人の関係は愛憎されるようになっていく。いつしか友情は愛情に変わり、エリザベスはロバートを「Bonny Sweet Robin (私の素敵なロビン)」と呼び、「お気に入り」であることを隠さなかった。散策や乗馬をともに楽しむ、晩餐会ではダンスのパートナーを務め、蜜月の時を過ごした。



女王とロバート、一部の側近のみが出入りを許されたエリザベス庭園（写真上）。好奇心に駆られたロバートの臣下の一人が密かに庭園へ潜り込み、その様子を書き留めたメモをもとに再現された。／毎夜晩餐会が開かれたグレートホール跡には、大きなアーチ型の窓と窓枠が残っており、人間と比べるとその規模がよくわかる（写真左上）。

ここまでなら、苦難を乗り越えた恋と言っていけるかもしれない。ただ事と難しくしていたのは、ロバートが妻帯者であったことだ。彼は18歳のときに、ノーフォーク地方の大地主の娘エイミー・ロブサートと結婚していたのである。「ロバートの妻が死ねば、女王は彼と結婚するだろう」といった危うい会話が宮廷内で口々に交わされ、醜聞はヨーロッパ中へ広まっていた。国王の父となることを夢見て散った父親の無念と、ロンドン塔やその後の宮廷生活で味わった屈辱を片時も忘れることのなかったロバートは、「まんざらでもない」とばかりにエリザベスとの日々を過ごしていたのだろうか。誰の目から見ても、妻エイミーの存在は「邪魔者」でしかなかった。そんな矢先、事件は起こる。



階段から落ちて亡くなったロバートの最初の妻、エイミー・ロブサート。

### 妻の謎の転落死

エリザベスが即位して以来、エイミーは夫と別居しており、その頃はオックスフォードシャーにある友人の邸宅で過ごしていた。夫妻が会ったのは1559年の初夏が最後で、エイミーはロンドンにあるロバートの屋敷に1カ月ほど滞在している。

ウィンザー城でエリザベスと過ごしていたロバートのもとに、驚くべき悲報が届いたのは1560年9月8日のこと。その悲報とは、妻エイミー死去の知らせだった。死因は寝室に隣接する階段からの転落による首の骨折。頭部にも2カ所の傷が見られたという。28歳の若さだった。

当然ながらロバートは妻殺しの容疑

をかけられ、さらなる醜聞を抱え込むことになった。しかし死因審問はエイミーの死を「事故」と結論づけ、宮廷追放の危機を免れる。死の真相は今もって不明だが、エイミーは当時末期の乳ガンを患っていた可能性が高く、背骨にガン細胞が転移し、転落によりもろくなっていた首の骨が折れて亡くなったという説が有力だ。しかしながら、転落は事故だったのか、あるいは闘病や夫の浮気による精神的辛苦から逃れるための自殺だったのか、それとも他殺だったのかはわからない。

妻殺害疑惑騒動の後、エリザベスは周囲の強い説得もあって、ロバートを結婚相手として真剣に考えるのを控えるようになる。自身は殺害を指示したのではとの噂も飛び交い、フランス、スペインといった周辺の強国との緊張状態が続いている今、付け込まれるような隙を見せることはできず、女王として理性的な判断を下したのである。それに実際のところ、元反逆者で殺人疑惑もある「ただの騎士」の男を、欧州各国の王族からの求婚を退けて夫に据えることは容易ではなかった。

編集部の独断で言うならば、エリザベスはおそらくこの時点で、ロバートとの結婚は諦めたのではないだろうか。その理由は、夫を亡くし、嫁ぎ先のフランスから戻っていたスコットランド女王メアリー・ステュアートの新たな夫候補として、ロバートをスコットランドへ送り出しているからだ。出立を済ませるロバートに対し、エリザベスは「私が生まれてくる子どもは後見人となります。イングランドとスコットランドを統一する国王を、2人で育てましょう」と説得したという。この野



ロバートが極秘婚をした2番目の妻で、エリザベスの血縁にあたるレティス・ノリス。

## ロバート・ダドリーが永眠する「聖メアリー教会」

ケニルワース城から車で15分

ケニルワース城から車で南下すること、約15分。ダドリー家の本来の居城であるウォリック城の目の前に、一族が眠る聖メアリー教会が建っている。

反逆罪で処刑されたロバートの父親、ジョン・ダドリーやレティ・ジェーン・グレイの夫ギルフォード・ダドリーはロンドン塔内の教会に埋葬されているが、ロバート&レティス夫妻、のちにウォリック伯爵に復位した兄のアプローチは、この教会で眠りに就いている。

St Mary's Church  
Old Square, Warwick, CV34 4RA

▲ピーチャム・チャペル内には、ロバート夫妻の荘厳な墓がある（写真左の左端）。／墓上に飾られたロバートとレティスの像（写真右）。跡継ぎをもうけるために強行再婚したものの、息子は5歳で夭逝。兄夫妻も子どもに恵まれず、処刑を逃れて辛くも生き延びたダドリー兄弟だったが、一家の血筋はここで途絶えた。

